

## 資料紹介 「震災の一週年を迎かひて」

『市史通信』第五号において関東大震災時の横浜市役所の対応をまとめたが、今回は横浜市史資料室所蔵の「震災の一週年を迎かひて 東京市河港課員報」（鮫島茂家資料）から東京市役所の活動を一部紹介したい。

一九二三（大正一二）年九月一日に発生した関東大震災は、横浜市と東京市に壊滅的な打撃を与え、それぞれ市役所は応急対応にあたった。その時の経験は歴史災害の教訓として現在に活かすことができよう。ただし、個々の市役所の分析だけでは、応急対応の問題点を浮き彫りにすることはできない。横浜と東京、抱えている人口や面積は違えども、まったく同じ時に大災害を経験した二つの自治体を比較・検討することで、各々の問題点を明らかにす

ることが可能である。そのためには、最初に現存する歴史資料から二つの市役所の活動を解明する必要がある。

当資料室所蔵の鮫島茂家文書の中には、東京市河港課の作成した「震災の一週年を迎かひて」という資料が存在する。この資料は震災一周年を契機に作成されたもので、東京市の野紙に震災当時の河港課の活動がペン書きで記されている。野紙は全部で三〇枚、筆書きの表紙を先頭に紙紐で綴じられ、各ページの右上には番号が付してある。また、表紙の右上に「訂正済」の記入がある点や、内容に修正が加えられている点などから清書前の下書きだと考えられる。

そうした修正を加えたのは、当時、河港課長であった丹羽鋤彦であろう。丹羽は鮫島の岳父で、大蔵省の技師として横浜港の整備を担っていたが、一九二一（大正一〇）年に大蔵省を辞し、東京市の道路局長兼河港課長に就任した。鮫島茂家文書には、

丹羽に関する資料も多く含まれており、震災関係では、本資料以外にも参与として関わった帝都復興会関連の資料がある。

さて、「震災の一週年を迎かひて」の中身について見ていきたい。冒頭の書き出しは、「大正十貳年九月一日



午前十一時五十八分!!吾々ノ印象ハ猶ホ昨日ノ如クダガ最早一週年ヲ迎フルノダ我市役所ハ府庁ト共ニ其ノ震害ト火災カラ免レタ、程近イ電気協会、警視庁方面ニ見ユル火焰ハ今内務省ヲ焼落シツアルトノコトデアル」と、震災直後の状況から始まり、九月一日の東京市役所の活動が述べられている。

当時、市庁舎は東京府庁舎と同じ建物で、麹町区有楽町二丁目に所在していた。横浜市庁舎と同様に、東京市庁舎も震動に耐え、救療活動の拠点となったが、「ソレ避難民、ソレ負傷者、ソレ死人ト夫々担任係人ノ指示ヲモ待チ得シテ構内ヘト流入スル混雑ハ混乱ニ替リ最高幹部ノ推挙スラ保持スルハ中々容易デナイ」と、市庁舎は混乱を極めた。東京市長の永田秀次郎の回想に依れば、午後二時から午後三時の間に非常災害処務規程を適用し、臨時に

丹羽を工務部長に指定したという（『青嵐隨筆』敬文館書店、一九二四年）。同資料は震災直後の状況をまとめた上で、河港課の日誌から項目ごとに同課の活動を記している。

物資ノ蒐集  
避難民ノ救助ト輸送  
月島勝岡渡船ノ活動  
芝浦其ノ他ニ於ケル物資揚陸  
水陸交通ノ応急施設作業  
大川以西ニ於ケル幹旋  
大川以东ニ於ケル幹旋  
市内河川障碍物除去ニ伴フ沈没物件引揚敷

紙幅の関係上、一つ一つの事業内容を紹介できないが、河川や港湾に関連した物資の輸送業務が多い。この「記録を『東京震災録』や『関東大震災政府陸海軍関係史料』などの関連資料と突き合わせることで、震災時の東京市河港課の活動を浮かび上がらせることが可能である。同資料の全文については今後刊行予定の紀要で紹介したい。

関東大震災の実像を知るためにも、また、震災時の横浜市役所の応急対応を相対化するためにも、東京市や横須賀市など他の自治体の活動にも目を配っていく必要がある。

【参考文献】鈴木淳「関東大震災―消防・医療・ボランティアから検証する」（筑摩書房、二〇〇四年）／災害教訓の継承に関する専門調査会編「二九三 関東大震災報告書」（内閣府中央防災会議、二〇〇九年）